

『挑戦と希望の地域支援・地域支援における他機関連携』 感想レポート

地域活動支援センターあわいや 生駒新一郎

長年、精神障がいの方々の支援を模索、実践されてきた、小林順一さん（NPO 法人宮崎もやいの会）が主催で、精神障がいある方の地域生活の支援を連携して行うことを実践を通して学ぶものでした。

いや～、発表者、パネラーの方々、その実践に基づく話しの熱量と愛情を強く感じるもので、経営と人権のバランスも難しくもとりながらで、ただただ、びっくりで納得で嬉しくなりました。

訪問看護の事業所が、色々手をつくして障がい福祉の事業所にも連携を踏み込んで、そこで支援を受けられる方が自分の調子に戻していく事例には、驚きました。そんな垣根を超える柔軟さがあることがなによりだが、そうならない現実もあるのに・・・と。なかなかない事例で。

精神医療の訪問看護では、不必要な介入を試みよう、指示書を医療機関に求めて来て、それを拒むと、主治医をその訪問看護事業所が変える、という事例には驚きました。でも、障がいのいろんなところでも聞き及ぶもので、「お金」をファーストにするとほんとにおかしくなることで。

今日の研修では、「困っていること、ほっとけない」「その人の有り様を尊重」「人としての権利を尊重」が貫いてあるところと感じました。そこが逸脱すると、事業者経営が一番になるということ。

今日のお話しでは、皆さん、連携を大事に、それは、話しが通じ事の本質を共有できるところを大事にされていらっしゃった。

行政の様々な矛盾の政策で狭間に追いやられる人がいることに、あきらめずに、行政が納得できる働き掛けと声を上げつつけること、の必要性を強く叩き込まれたようにあった。

以前、困り事を抱えた方が飛び込みで、あわいやに来られたことがあったが、話しを聞くだけで、どこにも繋げず、その場を終えていたことを思い出し、今日の話しを受けて、申しわけなくも思った。

小林さんは、精神障がいの方の直接支援だけでなく、社会資源を活かして地域が変わる取り組みを模索され、大学、行政、医療、福祉との連携を探って来られています。

その流れで、地域生活支援に関わる業種の方との連携を重ね「語ルシストの会」が生れ、色々なことを話しあい、今回の企画につながっています。

今回、登壇された、福祉と医療の皆さんが連携のキッカケの一つが、小林さんの作った連携づくりの広場だったと言われていました。